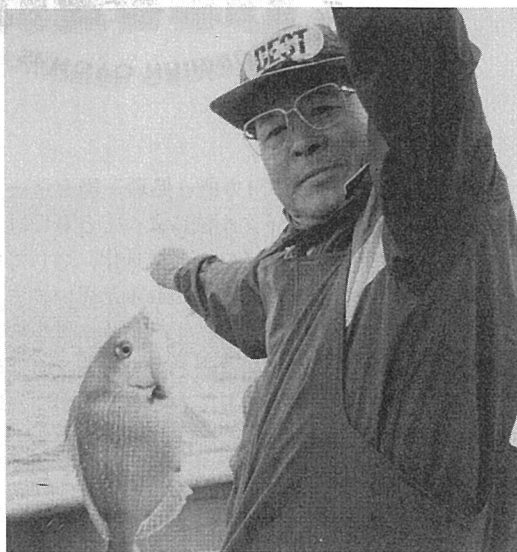


「……釣りも紳士のスポーツです……」



Hiroshi Tomita 富田 弘

●株式会社富田商店 代表取締役
出身/名古屋市西区
血液型/O型
好きな言葉/信頼



師崎から出る漁船「祥福丸」と船頭さんがパートナー。四季おりおりの旬を求めて海釣りに出かける富田弘さんを花井さんが訪問。お気に入りのマダカの話や、釣りの「浮気」(!)についてお聞きしました。とにかく大漁大漁の富田さんにも釣りのポリシーがたくさんおありのご様子。さてさて、海釣りの醍醐味は…。

●●●
師崎のマダカ

——海釣りの達人、しかもその釣果がナマ半可じゃないと伝え聞きました。

富田『いやいや、好きなだけで40何年というだけです。女房がいるから、やってくれるんだね。』

——というと、かなり奥さんのサポートが？

富田『そうだねえ、運が良かったというか、女房の父親がこれまた釣りの好きな人でね、その薫陶を受けてか、女房は魚をサバくのはお手のものです。私が釣ってきたのをササササーと。』

——刺身に？

富田『そうそう(笑)。けれども、そう食べられるもんじゃないね。特に自分の釣ってきたのは。』

——(マダカが市場のごとく並んでいる、釣果の写真を見て) こんなにいとどこかの店先で撮ってきたような感じですね。これをみんなさばくのは大変だけど、食べるのも大変！

富田『もらっていただくんですよ。私が釣ってくるのを楽しみにしている人もいるし、一緒に行った人がみんな大漁、ということでもないしね。』

——自分が釣ってきたものを食べる、というのは、これほどイキが良くて確かな材料はないんじゃないんですか。

富田『これは師崎のマダカだけど、うまいですよ。マダカというのは養殖がないんです。それを釣ったら生けジメしてね。血が回らないようにしておく。頭の下、ここにエラがあるでしょ、この中の動脈ね。そして尻尾に穴をあける。血を抜いちゃうんです。こうしておくことが、おいしい刺身の秘訣だね。』

——「生けじめ」、という言葉は知ってましたけど、そういうふうにするものなんですか。

富田『けどね、要するに首っ玉を折っちゃうわけだから、こういうのはあまり店頭には並べられないわね。』

—— そうですねえ、店に血まみれで並んでたら、ちょっとね…。

富田『でもホントはね、血がついている魚の方が、買うにはいいわけですよ。下処理がしてあるということだからね。魚というのはホントにこの処理で、決まってくる。サバなんてのは、これをやらなきゃどうしようもないね。』

—— サバ、大好きなんです。一度、釣りたてのを刺身で食べてみたい。

富田『サバはホントに鮮度だねえ。私が釣ってくるヤツは、市場の大将が取りにくる。』

—— それくらいウマイ？

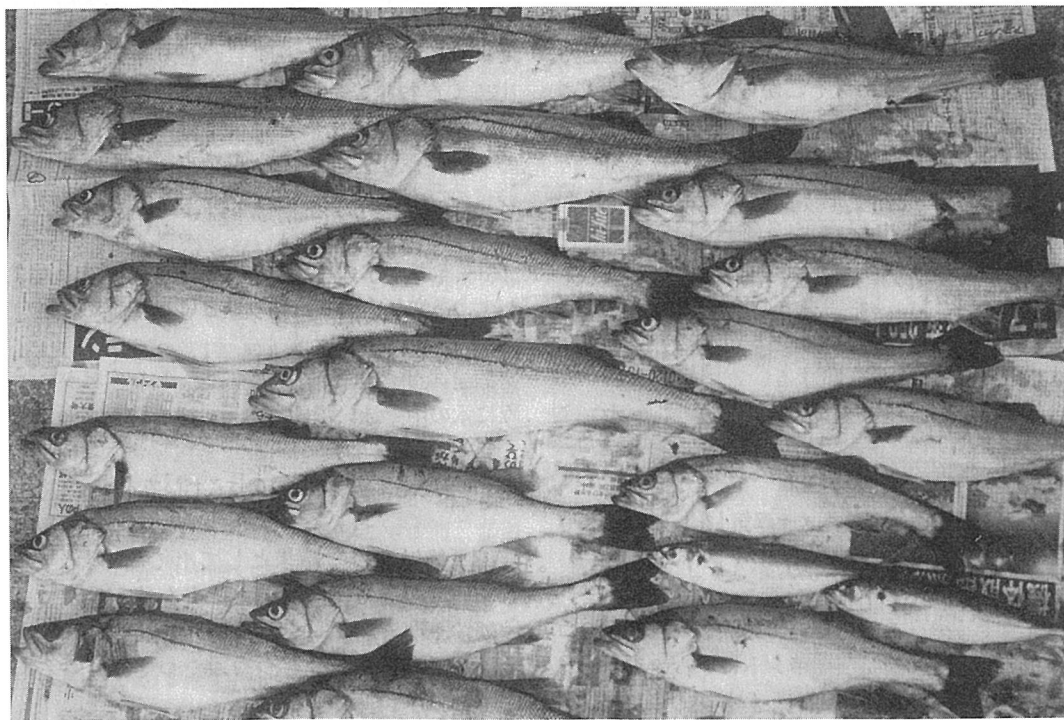
富田『そうそう(笑)。マダカなんかもね、私の知り合いに、もと校長先生で、デパートまで魚を買いにいく人がいる。その人が私の釣って来るのを楽しみにしてくれるんですが、デパートの水槽で買って来たのよりウマイと言ってくれる。これが嬉しいんだねえ。自分の釣ってきた魚を人に喜んでもらえるほど嬉しいことはない。それでまた行くんだねえ(笑)。』

—— 釣り場は主に師崎ですか。

富田『あちこち行きましたけどね。今は師崎がほとんどです。師崎というところは、ホントに海が豊かでね。年間を通じていろんな魚が釣れるんだね。魚自体も非常にいいです。』

釣りは浮気をしないこと

—— (釣果の写真は何枚も見ながら)しかし、どうしたらこんなに釣れるんですか。



「…………釣りも紳士のスポーツです…………」

富田『ひとつはね、浮気をしないこと。』

—— 浮気？

富田『そう。例えば船頭さん。この人と決めたら一本。海に出るということは大変なことなんです。海の状態、潮の流れ、天候の変化、ヘタに素人の判断できることじゃない。毎日毎日、海に向き合って海と仕事する人でないとわからないことがある。ですから、釣糸一本垂れるのも、やはり信頼関係です。一度や二度釣れなかったからと言って、次はこの船頭さん、次はこっち、じゃダメですね。お互い信頼しあってやらないと。船頭さんも人間。ただ仕事だけと割り切れないものもあるはずだしね。』

—— そういうことを大切に、はじめてこんな釣果というものがある？

富田『それだけじゃないよね。やっぱり釣り人の腕というもの、これは必要。腕っていうのは、エラそうに聞こえるかも知れないけど、経験と工夫だね。「勘」というのもそこから来ると思いますね。人と同じことをやってたら釣れない。じゃあどうする。そこから始まると思うんだけど。』

—— 創意工夫ですね。例えばどういうことを？

富田『例えばね、船頭さんはプロでしょ。船頭さんを観察する。何かヒントがある筈なんです。それと、指導を仰げる、というかね、いろいろ相談できる船頭さんがいるかいらないか、これは大きい。』

—— さっきおっしゃった「浮気」をしては船頭さんとそういう関係には…。

富田『そういうこと。プロの経験というのはスゴイからね。それとね、今ホントにいろいろとハイテクのリールとか、いい竿とかありますよね。



いいものはもちろんいいんだけど、そういうのに頼りすぎてちゃダメじゃないかなやはり。基本は手で釣ることだと思うね。「手で釣る気持ちで」と言った方がいいかな。

—— すると「手抜き」もしなくなる？

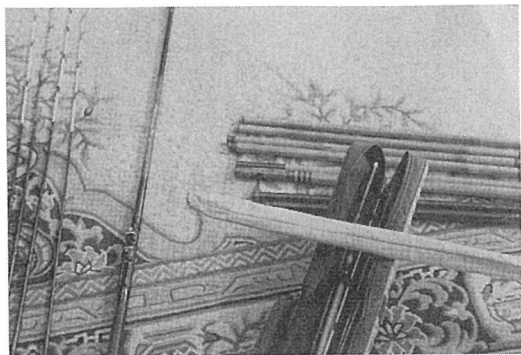
富田『そう、手抜きはダメ。面白味も半減するしね。ハリスなんかもね、2メートルくらいとする。するとねじれたりよじれたりするところが出てくるわね。そしたらすぐ直さないといけない。面倒くさいからといってそのままにしておく、エサが水の中でクルクル回るんだね。結び目のひずみというのはこういうことになる。』

—— エサが水の中で踊っていては、魚も「ん？ あやしい…」ということになりますよね。

富田『エサがエビだとすると、そのエビがふつうに水の中で泳いでいなきゃいけないからね。』

—— 何でも手抜きというのはこわいですねえ(笑)。

富田『絶対あとで結果として出てくるね。ま、こういうのは一例だけど、工夫を積み重ねていけば、やがて船頭にも話せない、船頭も知らないテクニックが、ひとつやふたつできてくるもんですよ。』



—— うーん。信頼関係とは別の所で、ですね (笑)。

釣りは紳士のスポーツ

富田『花井さん、「釣りの好きな人は気が短い」って聞くでしょ。』

—— はい。何か気長なスポーツって感じがするのに、それが不思議でした。

富田『釣りってというのはね、耐えず糸をたぐってエサがついとるかだとか、いろんな確認、細かい作業をしなくちゃならんものなんですね。気短かにはびったりなんですよ。私はそう思ってるんだけどね。それに魚を人よりたくさん釣りたいと思ったら、苦勞も倍しなきゃいけないわね。すると、あれこれ考えて、やってみないといけないわけだしね。決して釣りというのはボーッと糸垂れてるわけじゃないですよ。』

—— そうですねえ。船を出して、ということになると、これはもう釣りもスポーツですから危険も伴いますしね。

富田『私が師崎が好きなのは、ひとつはその「危険」のための体制が万全なとこですね。船頭さんもプロ意識の高い人ばかりだし、海の事故というのはまずない。もし救難事故があると、無線ですべての船に連絡が行きます。それで全船休船になる。』

—— ひとつ救難があっただけで？

富田『そう。まず、みんなで救助するということ。これはジェントルマンシップだと思う。それと海はひとつなんだね。自分達の失敗で大勢の人に迷惑をかける。楽しみを奪う。そういうことにならないように「自分さえ良ければいい」という行動をしないことへの戒めもあるんだね。私は紳士のスポーツというのはゴルフだけじゃないと思う。釣りもルール、マナーというのは、ホントに大切。これから釣りをする人、ビギナーの人にも「釣れりゃいい」というものじゃないことを、言っておきたいですわね (笑)。』

—— まとめていただいて恩にきます。

INTERVIEWER

花井 美紀

(株) コミュニケーションデザイン代表。
TV・ラジオのインタビュアーとして活動後、
(株) コミュニケーションデザイン設立。
セミナー、イベント、ビデオ制作などの企画の傍ら、講演活動など幅広く活躍中。



「……………釣りも紳士のスポーツです……………」